

ドイツ語が開く世界

唐沢 徹

来年度から一年生のドイツ語授業に統一テキストを導入することにした。これはフランス語でも中国語でも同じなのだが、先生方はその教材の選択のことで結構頭を悩ましている。ドイツ語でも何人かの先生の意見を集約して、最終的に決めることができた。そのテキストはドイツで撮影されたビデオがついていて、それを利用しながらドイツ語の総合的な練習が出来るようになってきているのだが、サンプルのビデオを見て少し考えたことがあった。ビデオの舞台はバイエルンの中程度の規模の、古い町である。登場するドイツ人の何人かが、はっきりとしたバイエルン言葉を話している。私自身はそのバイエルンのミュンヘン大学に合計で二年間いたし、親しい友人たちとの長い付き合いの中でバイエルンの言葉には慣れ親しんでいて、そのビデオのバイエルン訛りは親しみが持てる。だが、他の先生たち、特にネイティブのH先生とS先生にはどうだろうか？ ということが気になった。お二人はともに北ライン地方の出身で、バ

ィエルンにはあまり縁がない事も知っているし、何よりも、最終的にこのテキストで行くことで合意した時に、私が「場所はバイエルンですがね」とコメントしたのに対して、H先生が「そうなのだ」とばかりに少し顔をしかめたのが気になっていったのだ。もちろんそれはただそれだけのことで、ドイツでの地方のギャップが少し顔を覗かせたということなのだ。

教材のビデオにバイエルン方言で話す人が数人登場するということ、この教材が、もっぱら標準ドイツ語を学ぶ日本人学生には向かないということになるだろうか？ という考えが心配症の私の頭の中をチラッとよぎった。ドイツの中にもそれぞれの地方の言葉に対するさまざまな評価・イメージがある。そこには、かつての領邦時代からの対立感情が今に引き継がれていることもある。その典型が「プロイセン」と「バイエルン」である。ミュンヘンの新聞に毎年のように、その年にバイエル

ン州の公務員になった人の出身が州別に報道される。その中で特に大きく取り上げられるのは、その中の「プロイセン人」の比率である。「ついにバイエルンの役人の一割以上がプロイセン人になってしまった！」といった、現在の連邦制からは考えられないような見出しが踊る。また夏休みのあるころ、ヨーロッパの北の国々およびドイツ国内の北の地方から、南のイタリア・旧ユーゴのアドリア海・ギリシア方面へ長期休暇のために移動する人々の自動車の波が集中して、必ず大渋滞が起こるアウトバーンのミュンヘン―ザルツブルク間の渋滞予想などでは、「七月の〇〇日頃には、デンマークやオランダからの車、そしてプロイセン人の車の殺到が予想され、〇〇キロの渋滞となるでしょう」といった報道がなされる。ここでは北ドイツの「プロイセンの人」はドイツ人ではないような外国人扱いである。

反対に北ドイツでは、南のバイエルン州等を特に田舎扱いすることがある。特にバイエルンの言葉をその響きから、自分たちとは別の言葉として位置付ける。数年前、ベルリンへの首都機能移転に伴って連邦議会がボンから移った記念式典があった、その際の各州代表者の演説について日本でも報道されたことがある。このような公式の場では、どこの地方の出身であろうと、一定の地位にある人ならば当然標準ドイツ語を使う。日本人記者の報告では、バイエルンからの代表が地方の訛り丸出しで演説をしたということであった。推測になるが、このバイエルン

の政治家は当然標準ドイツ語で話したはずである、しかし、かすかにではあれ、そこにバイエルンの言葉の響きが混じる、そして聞く側は敏感にそれを聞き分ける、当然のことである。日本人記者もそれを把握した、ということと思われる。

本当のことを言えば、ベルリンの言葉そのものにも極めて強い訛りがある。一体なぜバイエルンの言葉がそれほど差別されなければならないのかという気持ちもあるが、考えて見ればお互い様である。ただ、標準ドイツ語への近さ、アクセントへの努力という点でそれなりの評価が出てくる。これは各種の社会言語学的調査が明らかにしている。

ここで、私の最初の心配にもどる。日本人学生にとって、そのような若干たりとも標準ドイツ語でない発音の登場人物が含まれる教材は教材として不適當であろうか？ 結論は、否である。われわれは、これからドイツ語を学ぶ学生も含めて、基本的に標準ドイツ語を学ぶべきである。これはドイツ語圏のどこに行っても共通のコミュニケーションをするために不可欠である。だが、実際には行った先々にその地方の言葉がある。どこかの大学で学ぶためには、その地域での生活が伴う。そこでの話し言葉はたいいてい標準ドイツ語ではない。人々はたいいてい Diglossie（英語では diglossia、ダイグロッシア）つまり二言語変種使い分けの言語生活を行なっている。ドイツでは、皆が標準

ドイツ語を普通に使っているというのは半分正しくて、半分間違っている。私自身日本での大学・大学院を通じてドイツやオーストリア出身の先生たちに習う機会が多くあった、また自分からドイツ人留学生に個人的に会話を学んだこともあって、ある程度の自信をもってドイツに行ったが、ミュンヘンでたいいていのことは問題ないにしても、もっぱら地元の話し方をする人々とのコミュニケーションはしばしば冷や汗ものであった。それは、少し郊外へ行けばなおさらで、さらにバイエルンの田舎ではほとんど聞きとることさえ出来なかった。そこから推して考えれば、ドイツ語圏のほかの地方へ行けば人々の日常会話（地域生活の）がもつと難しいであろうと予想して、それ以後大体そのとおりであった。オーストリア南部旧ユーゴやイタリアに近いOssacher湖を冬に訪れ、翌朝あまりの寒さのためか、ポンコツで手に入れて乗っていたBMWのエンジンがかからず、近くにいたホテルの従業員に声をかけたがお互い話を通じず、マネージャーのような従業員とようやく話しが出来たという経験もあった。今考えてみると、あのあたりは古くから南のスロベニア人が住んでいるところで、ひよつとして相手の言葉にはその影響があったのかもしれないと思うが、よくはわからないままである。けれども同様のことは何度も経験した。たとえば、ミュンヘン北西一〇〇kmほどのLainggenに住むドイツ人の知人夫妻のもとで、その知りあいで地元の町中で牛を飼って

いるある家族を訪れた時も、その男たち（たいていは年配であったが）の言葉もわからなかった。ただ一番下の、その兄たちの面倒を見ている妹だけとは話を通じるといふ状況であった。その兄さんたちというのは、若干偏屈で周囲の町中の人々ともあまり交際がなく、もっぱら牛の世話をするだけであったので、恐らく自分たちの言葉以外には、たとえ標準語であろうが関係のない（言語）生活を送っているのである。断っておくが、良い人たちである（妹さんの通訳でコミュニケーションが出来た）。はじめにバイエルンの例を出したが、このような状況はドイツ語圏の全体を見回して存在するのである。ただハンブルクを中心にも多くの人々が標準ドイツ語を多く用いる地域はある。これとても、北ドイツの本来のいわゆる低地ドイツ語が標準ドイツ語（新高ドイツ語）とあまりにかけはなれてきたために、この地方の人々が標準ドイツ語をいっそ「外国語」のように取り入れて使い始めた結果なのである。当然地元の「低地ドイツ語」方言は存在し、時にその保存運動も起こる。ならば、バイエルンのある町を舞台にした教材に「バイエルン言葉」を話す登場人物が数人（それも地元の人というキャラクターで）登場することは、「標準ドイツ語」を学ぶ日本人学生のための教材として不適当というような考えはまったく誤ったものだったのである。ドイツ語を学ぶということには、同時にドイツ語圏についての、その地域、その歴史、その文化を学ぶことと不可分であ

り、教師は積極的にその紹介を行なうことも必要なのである。基本的なコミュニケーション能力のための「標準ドイツ語」の練習を基本に、ドイツ語を学ぶ人たちは、直接ドイツ語圏の実に多様な世界に目を向けるべきである。この現代に、われわれのドイツ像、さらに大きくいえば世界像はあまりに固定し、形骸化しているのではないだろうか。日本人はこの点であまりにも積極性がなく、怠慢で、なんでも分かつたつもりになってはいないか？……考えなければと反省する。

今は、確かに私たちのような教員が、ドイツ語その他の言葉を学んだときと環境は一変している。インターネットからミュンヘンのバイエルン3のラジオ放送が聞こえる。おなじみのメロデーに続いて、交通情報が流れる、アウトバーンA8のOdelzhausenで事故、あのあたりはまっすぐなのだけれど両側の森が迫り、丘を越えるような地形でなんだか事故が起こる。

ミュンヘンを西から北へ迂回するKarlsfeldではいつものように渋滞。ミュンヘンの都心は“zähflüssig”（のろのろ運転）。Sendlinger Strageでは工事。なぜ、このような情報を遠い日本に聞けるのだろうか、一体なんで？ と考えてしまう。一方、手元に送られてきているドイツの自動車雑誌には、もちろん日本製の車が日本同様すぐに取り上げられるのは当たり前のことであるが、終わりのほうのページ全体はRTL IIという民間テレビ局の広告で、ANIME Montag bis Freitag [アニメ：月曜か

ら金曜まで]とあり、HAMTARO、DETECTIVE CONAN、SHINCHAN、RANMAとあり、例のキャラクターたちが勢ぞろいしている。もちろんこれらはドイツと日本において固有のことではなく、世界中で起こっていることなのだが、遠く離れていた国が、いろいろな意味で近くなった。飛行機で飛ぶ時間は短くなり、航空券の価格も安く、また日本人の所得も昔からすれば相対的に豊かになった。これからのドイツ語の勉強の手段も変わって行くであろう。ただ、そのように近くなったという「感じ」と、実際に日本人がドイツに行った場合に感じ取る「違う世界」という認識との間には、依然として大きな隔たりがあるに違いない。事柄はそれほど単純であるはずがない。ドイツ語を学ぶことで、とりあえずドイツ語圏世界へのアクセス手段を徐々に獲得していくことになる。新しい世界がそのことによって開けるのであるから、「言葉」の意味をもう少しまじめに考えてもいいのではと思う。